

## 伝能阿弥筆《三保松原図》への視座—制作意図に関する一仮説—

今村采香（学習院大学）

伝能阿弥筆《三保松原図》（兵庫県立美術館蔵）[以下、本図]は、紙本墨画金泥引の屏風六曲一隻を全六幅に改装した作品である。制作年代は十六世紀前半、作者に定説はなく、三阿弥あるいは相阿弥様式を引く画人とされている。図様は、鳥瞰的な構図に、中景の右端から四扇にわたって三保松原と伊豆の山々、左端二扇に清見関と清見寺が描かれている。先行研究によると、元は、左隻に富士が描かれた一双の屏風であり、表現には、実景と八景が混在することが指摘されている。本図を検討する上で、左隻の図様の復元は重要課題の一つである。

本発表では、先行研究を踏まえ、本図の左隻図様の復元を試みる。さらに、清見寺の史的変遷及びその背景に着目することにより、制作意図に関する仮説を立てることを目的とする。

富士・三保松原・清見寺を描く水墨画の定型図様として、伝雪舟筆《富士三保清見寺図》（永青文庫蔵）および伝雪舟の図様を引く屏風群は多く現存するが、本図は、前述の図様タイプとは明確に異なる。一方で、本図の清見寺付近の描写は相阿弥筆《瀟湘八景図》（大徳寺大仙院蔵）の一部と類似することから、全体としても相阿弥の図様を引くことが想定される。さらに、狩野派模本中の相阿弥の《山水図屏風》（東京藝術大学美術館蔵）を含めて図様比較を行うと、左隻には、富士の他に建物が描かれていたことが類推される。

本図に描かれる景物の内、清見寺は、五山制度のなかで十刹に列せられ、東海道の要衝にある名刹として知られていたが、十五世紀後半には荒廃し、天文年間に、駿河出身で今川義元の参謀であった妙心寺派の高僧・太原崇孚を中心として再興されている。この時期には、今川氏の領地であった河東地域へ北条氏が侵攻し、一時期、この地域を北条氏の勢力下へ置いたが、天文十四年に今川氏が奪還に成功した、いわゆる「河東一乱」が生じる。その後、義元は河東地域の支配を強化し、宗教政策の面では、臨濟寺を頂点とする本末関係を再編成したことが「臨濟寺文書」から知られる。

再編成にあたり、中心的な役割を果たしたのが太原崇孚であり、天文十四年には現在の富士市にあり、乱中に焼けたと思われる善得寺を再興した。同寺は、河東地域における中心的な寺院として、妙心寺派の教線拡大の拠点となり、富士郡・駿東部に末寺を持っていた。また、清見寺と善得寺の再興の時期は、本図の推定制作年代とも重なり、その制作背景には、今川義元または太原崇孚の意図が見込まれる。

以上の点から、本図の制作には、今川義元と太原崇孚が関わっており、左隻には、今川氏の宗教政策に組み込まれ、かつ、景物の位置関係が実際の位置と符合する善得寺が描かれていた可能性を提示したい。